

紀伊・房総

◆35◆

房総半島を南下する川シーワールド、誕生
J.R外房線の終点が鳴川駅、その手前から安寺(日蓮聖人)、鰐の浦(国指定特別天然記念物)などが観光地と続き、現代では、鳴川駅として有名です。

鴨川市天津の浄土真宗寺院善覚寺の過去帳で、天津村に滞在した関西漁民をみると、紀州有田郡の広、栖原の両村からの漁民を中心にして紀州人が821人、他地域から180人などある。干鰯やアワビ獲りに関わる漁師や商

人、江戸へ鮮魚やミカンを運ぶ船業者、当地に生活品を卸す商人などが江戸をにらんで集まり、産業と商業が両輪で発展した南房州一の商業都市であった。

形村の運輸業の四郎左衛門扱いで江戸まで船積みしてもらい、「大仲間」と呼ばれるようになつた。

れず、80年の歴史を終えた。「先祖ハ右衛門従申伝事」の結びに、
イ) 紀州漁民や住民が他国出身者に比べ、商機に恵まれたのは、東浦賀や江戸の干鰯問屋を通じて物流を強化したからだ。今で言うと、マーケティングの勝

西宮に先祖を持つ四位
六右衛門の魚の商売が
りが紹介されている。
江戸時代に入つて間
もなく、六右衛門は江

を続けた。しかし、イ
ワシの干場に困り、大
名の西郷氏に願い出て
仲間7人分の鱗干場を
ニタ間浦に与えてもら

利 口 漁村の魚の産業 化に伴つて、人々の生活レベルが上がり、主従関係・帰属意識が薄

現代に通じる経営体系

戸で米屋を営む同郷の太郎兵衛により、房州船形村（館山市船形）で魚商売に成功してい る同郷の西宮四郎左衛門を紹介され、魚商壱門を始めた。1618(元和4)年から丸20年、船形村でしつかり商壱として元手金を作り、小漁船を引き連れて天津村に移った。天津村は漁獲が多くたが、押送船がなかったので草物取次納屋を設け、船

つた。年々豊漁が続きた。年間に干鰯を2万5000俵も生産高をあげた時は、運上金も格別に上納するほどだった。「天津千軒」と言われるほど産業と商業で盛り込んだ。しかし繁栄は長く続かなかった。

1703(元禄16)年の大津波を伴う元禄地震の損害と、世話になつた大名西郷氏の封が重なつて、六右衛門家は魚商売が続けこ

くなり、水主層の確保が難しくなってきた。(本音と建て前の芽生え)と反省点が記されている。

つた。年々豊漁が続きた年間に干鰯を2万500俵も生産高をあげた時は、運上金も格別上納するほどだった。「天津千軒」と言わわれるほど商業と商業で繁盛した。しかし繁榮は長く続かなかつた。

くなり、水主層の確認が難しくなってきた。
(本音と建て前の芽生え)
と反省点が記されてい
る。

私が思うに、これまでの背景には縁故組織のもうさや人間の傲慢さ

くなり、水主層の確保が難しくなってきた。(本音と建て前の芽生え)と反省点が記されている。

私が思うに、これらの背景には縁故組織のもうさや人間の傲慢さが見え隠れし、現代に通じる経営の在り方を示唆されており、10年と続かない時代の流れの速さを痛感した。

天津村江戸商人でにぎわう商都

絵と文・熱田親憲 題字・熱田秦華